



# 新しい「コミュニティ」づくりから 自治会活動の活性化へむけて

日野市社会福祉協議会  
大島 祐子

## 活動の背景

日野市は、東京都の郊外南多摩に位置し、多摩市、八王子市、稲城市、町田市に隣接した人口16万、高齢化率14%の市で、都内の多くの地域がそうであるように、旧住民と新住民の地区が混在している。

当市は、昔から多摩川梨を栽培していた果樹園が多かったが、後継者不足から農地や梨園を手放し、その跡に住宅が建ち新興住宅街となっている地区も多い。一方、多摩丘陵を切り開き公団住宅が林立し、東京方面へ通うサラリーマンのベッドタウンになっている。

このような事情から、高度成長期の転入により形成された地区、権利意識の高い地区、昔から住み続けている人々で形成される地区等々、それぞれが様々な特徴をもっている。

その影響は、自治会活動にも変化をもたらし、いままで行っていた季節行事の取りやめ、例えば昔からのお正月につき物の行事である「どんど焼き」さえもが、煙を嫌う近所の苦情で中止せざるをえなくなった地区もある。

あまり近所の人々とかかわりを持ちたくない、面

倒くさい、プライバシーに触れてほしくないなどの住民意識が顕著に表れており、自分の家族のこと以外に地域への関心が薄いのは心の余裕がないことかとも感じている。

しかし、いまの生活が永遠に続くはずはない。

もし、年老いた親を引き取ったら？、もし子供が登校拒否になったら？、もし家族の誰かが倒れたら？、そのとき地域の住民同士でのたすけあいが必要と気付くのではないだろうか。

近所の人々の名前を知ろうとしていなかったことは、自分の存在もわかってもらえていなかったことであることを。また、人は孤独では生きられないことを。

田舎から呼び寄せられた高齢者が、コンクリートジャングルで道に迷い、自信を失って引きこもりついに生きる気力さえも失ってしまうことや、また一方、子育てに悩み、我が子に虐待をしてしまう母親等、それぞれの世代が悩み孤独感を感じつつ生きていることを。

そんな今だからこそ、社協は福祉コミュニティづくりを進める必要がある。

## 1 小さな「ふれあいのつどい」づくりを手始めに

### (1) 在宅ケア事業の会員によびかけて会食会を

在宅高齢者を対象に社協が実施している住民参加型在宅サービスの「高齢者在宅ケア事業」の担い手会員が、ケアを受ける会員のお宅へ行き家事援助をしていたあるとき、一人暮らし高齢者宅

での、掃除、洗濯、買い物、食事準備を終え帰ろうとした折、高齢者に「折角作ってもらったのだが一人でテレビを見ながらの食事は、寂しくてたまらない。一緒に食事をしてはもらえないだろうか」と懇願された。

同じような訴えを経験し、高齢者の気持ちを感じ





じていた会員たちが、やがて団地の集会所を利用して会食形式の食事会を企画した。

この地域は、昭和34年頃に建てられた団地で、入居者の多くは、当時上京し就職した若者達で、結婚して住宅難の中、高い競争率を突破してこの郊外の日野市に居住しはじめたのである。

それから3～40年たち、当時働き盛りだった世帯主の多くが定年を迎え、成長した子どもらも多くは、世帯を持ち団地を出て行っている。残された世帯は現在70歳代、伴侶の死で即一人暮らしになるのである。

また、一人暮らしになった高齢者が息子や娘夫婦に引き取られたり、あるいは施設に入所したりなどの理由で空室が目立つようになり、建物も老朽建て替えの計画があり、新しい入居者がなく、単に高齢化率が高いというだけでなく、子供の声あまり聞こえず、世代間の交流が少なく、並べて高齢者夫婦と高齢の単身者が多い地区であった。

この一地域で始まった食事会は高齢者に大変喜ばれ、終わるときには、「今度はいつ？」と聞かれるほどで、心から楽しみにしている様子がか

がえた。

その後、案内状や礼状等を通して文通によるコミュニケーションも取られるようになったのである。

## (2) 歳末たすけあい運動の地域福祉活動費を契機に

折しも丁度、「歳末たすけあい運動」のあり方について、それまで見舞金を中心であったその用途について検討期に入っていた。

見舞金と地域福祉活動費の割合を半々にする方針が打ち出され、これを契機に、社協として全市民的に「ミニミニふれあいのつどい」づくりを呼びかけることにし、「あなたの地区で支援を必要としている人たちに、つどいの輪を広げてみませんか」と社協だより、市の広報紙等で呼びかけた。しかし、ボランティア活動をしてみたいと思っている人たちも、何をどうしたらよいかはあまり判っていなかった。

そこで、このときすでに口コミで3団体くらいが「食事会」などの活動をしていたので、先に活動していた団体の人たちにキーパーソンになってもらい、各地域で「ミニミニふれあいのつどい」の説明や宣伝、広報役を担ってもらったのである。

## 2

## 様々な活動のコミュニティ「ミニミニふれあいのつどい」

社協では、市内に点在する「地区センター」を拠点に「ふれあいのつどい」を地域福祉活動として行う必要性和その財源の確保を打ち出した。

内容については、対象を特に高齢者に限らず、障害者の自主リハビリ、子育ての支援、外国人の支援と交流、在宅介護者の支援等々、市内各地で約40団体が「ミニミニふれあいのつどい」を開催するに至ったのである。

ボランティア活動をしてみると、自分が楽しくなるのがわかった。参加している人の笑顔にやる気がでてきた等々様々な感想がある一方で、活動を継続するうちにだんだん悩みも出はじめ、様々な相談が社協に寄せられた。

各地で開かれる「つどい」は、当然のことながら、

市全体の市民からの認知を得るため、特定の宗教色や政治色が無いように配慮した。また内容を把握するため土曜日や日曜日でも社協職員は必ず出席した。時期的に集中したときには、職員も手分けしての出席であった。

草の根の活動が根付くまでは、当分の間社協の支援は必要であった。



ミニミニふれあいのつどい  
子どもたちと手打ちうどんを作って食べる  
(小学校の家庭科室で)



### 3 コミュニティづくりの支援体制と社協職員の役割

#### (1) ボランティアが主体的に活動できるように環境の整備をする

他機関との連携、特に民生委員協議会への協力依頼は、必要である。

「つどい」の発起時に民生委員を含めて準備会を開催すること、支援の必要なひとの情報を民生委員を通じて入手することもあること、「ミニミニふれあいのつどい」の開催への誘いは地区の民生委員から「招待状」「チラシ」の手渡しなどの協力をしてもらうと安心して集ってくること、などを



ミニデイサービス「ひなたぼっこ」  
山野美容芸術大学の学生ボランティアに“ビューティケア”を受けて

地区ボランティアの方々にも伝えるなど民生委員協議会との協力体制は欠かせない。

また、相談については、各方面の専門家との連携を取っておくなどのコーディネート機能を発揮しておくこと。

活動の主体はボランティアであり、社協職員は徹底した後方支援、側面支援に回り、ボランティアの方々達成感を味わったとき、それが同時に社協職員の活動成果であろう。

#### (2) キーパーソンの発掘

グループのリーダーとしての役割をしているかを見定める。

その影響力をはかる。みんなが納得してついていっているか。

その人だけが一生懸命ではないか。次の人を育てようとしているか。

キーパーソンは目立たなく、その他の人々が生き生きしているか。

キーパーソンがいなくなっても意思の疎通が取れているか等々に着眼している。

### 4 新しいコミュニティづくりだけで良いのか

#### (1) 既存のコミュニティである自治会とのかかわり

新しいコミュニティづくりとしての「ミニミニふれあいのつどい」は、点在する福祉力を線で結びやがて面とした広がりをもせたのである。

しかし、はたしてそれでよしとしてよいのだろうか。住民の加入率68%である250余りの自治会との関係を切り離しては、あるいは乖離した活動であっては意味がないのではとの疑問がでてきた。

じつのところ、このことは一貫して気にかかっていた問題であった。そこで自治会に下記のような

設問でアンケートをとってみた。

- ①ふれあいのつどいの活動を知っているか。
- ②支援を必要としている人に声を掛けたりして安否の確認等をしているか。
- ③自治会としてふれあいのつどいをしているか。
- ④福祉委員(上記のような福祉活動を含む)を設置しているか。

結果は概ね次のようなものであった。

「声かけや見守りのような活動は必要だとは思いますが実行に移せない」「季節行事をしているが、段々子供も少なくなり役員のみ手もいなく縮小ぎみ





## 新しい「コミュニティ」づくりから 自治会活動の活性化へむけて

である」「自治会そのものが、存続することすら難しい。他の自治会はどんな活動をしているのか参考にしてみたい」等、悩みを抱えていることが浮かび上がった。

### (2) 自治会活動の活性化にむけ「シンポジウム」を

そこでもっと自治会に頑張ってもらいたいと、自治会活動の発表と自治会同士の交流を目的に、「'99 第1回がんばろう!自治会シンポジウム～新たな地域づくりをめざして～」と題して、次のようなシンポジウムを企画した。

**\*自主防災組織を形成し、活発に活動を行っている自治会**

**\*小学校を中心に自治会活動とも連携をもったコミュニティ**

**\*地域の中で高齢者対象の食事会、茶話会活動をしているコミュニティ**

**\*老人会、子供会と協働した自治会活動**

など頑張っている自治会の事例発表をして、問題提起を図った。

当日の、専門家による地域福祉に関する講演会へは多くの参加者があり、他地域での活動の発表には強い関心を示した。また自治会同士の交流会では活発な意見があり、日野市では初めての自治会シンポジウムは概ね良好であった。

日野市では、自治会連合会がなく、交流も少ない中で単一自治会としての悩みも多く、このシンポジウムの継続を望む声が多く社協に寄せられたことにも後押しされ、第2回を開催することにした。

引き続き第2回は「'00 第2回がんばろう!自治会シンポジウム～自治会に見守り活動を!～」と題して行うこととしたが、前回のシンポジウムの影響から、活動を検討してみようとする自治会には、「ふれあいのまちづくり推進員」が積極的に、見守り活動を中心に説明会や懇談会をしてアプローチを試みた。

### (3) 推進員の発案で寸劇も準備して

そのためのツールとして、声をかけあう地域、さ



「東町自治会にみまもり活動を」自治会役員もキャストに加わった寸劇  
焦げたヤカン、危いじゃない!!

さえあう地域づくりを目標に「みまもり活動」のパンフレットを作成したが、これに加えて「みまもり活動」は、説明より芝居で訴える手法がわかりやすいとのふれあいのまちづくり推進員の発案で、自分たちで「ふれまち劇団」を結成し説明の機会に演じるための準備をすることになった。

実際にあった事例をもとに脚本をつくり、監督を決め、本読み、リハーサルと、本番まで多忙の中、力を合わせて準備を進めた。

あらすじは、「娘と痴呆性高齢者の二人暮らし世帯で、娘は定年を1年後に控え、この母を絶対にホームには入れないと、仕事と介護に明け暮れているが…。ある日勤めに出た後、母はやかんをコンロに掛けたまま忘れてしまう…。それから……?」と問題提起をする内容である。

ちょっとした近所の気づき、何かいつもと違う、いつまでも閉まったカーテン、ポストにたまった新聞等、何気ないことかもしれないことに、気遣う人々の暖かさが「見守り」だと感じてもらえば劇は成功と準備の都度話し合っていた。

この手法をもって、自治会へのアプローチをつづけることにした。

第2回シンポジウム開催後、民生委員と複数の自治会との話し合い、打ち合わせを重ねて、「ふれあい懇談会」を受け入れてくれた自治会での説明に、この「寸劇」を演じたのである。

#### (4) 自治会役員もキャストに加えて

ある自治会では、懇談会を準備する過程で、「見守り活動」をより一層わかりやすいものにするため、そして気楽に集ってもらえるために、自治会の役員もキャストに加わってもらい、芝居を演じてもらったのである。

結果は、上々の出来栄で、集った人々は、芝居を楽しみ、そして少し深刻に見守り活動の必要性を感じてもらえたと確信できた。

しかしこの地域は、3世代同居も多く、古くからの住民同士のたすけあいが行われている地区でもあり、開催場所の保育園は自治会の中に存在して、園長がホールの照明等も提供してくれるほど、普段から施設とのネットワークもとれている非常に条件の整った地区であった。

#### (5) より開催出来にくい地区での展開をめざして

次のステップとしては、開催のための条件が整

っていない地区での開催を試みる必要を感じている。なぜ困難かを様々な情報をもとにリサーチし、その地区の特色、特徴をとらえ、どのような手法で浸透していけるか発見することが課題となる。

しかし、この「みまもり活動」の機運づくりを浸透させ、システムにまで構築するのは一様にはいかないことも認識している。それぞれの地区ごとに、ニーズの質も違えばケースも違えば、「プライバシー保護」との関わりの整理にはかなり気を使うところである。ましてや、問題によっては命に直結した活動にもなることは歴然としている。

今後の手法として、自主防災システム構築に絡めた活動として組みたてることや、救急救命講習の普及と合わせた活動として組みたてることも考えられるが、それぞれの機関との連携を密にしての活動となることは当然である。これらも、社協だからこそ出来る他機関との場面作りと考えている。

(事業・ボランティア係 主任)